



TITLE:

ヘルダーリン小論

AUTHOR(S):

高原, 宏平

CITATION:

高原, 宏平. ヘルダーリン小論. 独逸文學研究 1953, 2: 1-21

ISSUE DATE:

1953-12-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/186239>

RIGHT:

ヘルダーリン小論

高 原 宏 平

舌のない街は 痙攣^{いけいけん}をおこしている
喉をつまらせた噴火口のように

——マヤコフスキー——

ヘルダーリンの後期の作品は、いわば、自然の秘密が生み出した、山から掘り出されたままの水晶のようにほとんどすべてが未完成のまま、ぼくらの手に委ねられている。はじめから断片として、覺書のように書きつけられたものであるか、あるいは一度は完成を見ながら、なおその後、構想を變え、稿を重ねて、幾種類かの草稿を残したままになっているか。いずれにせよ、作品の大部分は詩句のひとつひとつに、くりかえし後から筆が加えられ、ほとんど未整理のまま残されている。詩ばかりではない。それぞれ異つた三つの作品断片をもつエムペードクレス劇はもとより、それと並行して書かれた數

多くの哲學的論文もまた、すべて断片として捨ておかれている。ひとつの作品は別の作品へ、ひとつの草稿は次の草稿へと、完結をみるひまもなく、つぎつぎに書き改められていつたのである。十八世紀以降、現代にいたるまで、西歐の主要な詩人のなかで、このように全作品の過半を断片、あるいは未完成のまま投げ出して、すべてを運命の手に委ねた詩人が、ほかにあるだろうか。ぼくらは、普通用いられている意味での作品の完成を、ヘルダーリンに見ることができない。しかし、藝術作品の完成とは、いつたい何であるか。完成とは、けつきよく何らかの意味で妥協であり、探求の停止、あるいは外部

からの壓力の遮斷を意味するのではないだろうか。ヘルダーリンの作品の斷片性はそのまま、始めと終りを結びつけて一切が成つたとする、世のいわゆる學者、藝術家流儀に對する痛烈な抗議とさえなつてゐる。全作品はおびただしい加筆の跡をとどめながら、斷片に斷片を重ねて、やがて、完全な狂氣の淵に消え失せてしまふ。しかし、ほくらは何よりもまず、そこに詩人の精神的緊張そのものの反映を見なければならぬ。たんなる作詩上の訂正とか發展といった觀念ではとうてい把えられぬ、精神の複雑な結晶過程を見なければならぬ。ヘルダーリンの生きた時代の矛盾が、刻一刻、それぞれ異つた段階において、その複雑な根底をあばかれ、つきとめられようとしていたのである。そこには、一切の遮斷がない。時代から、あるいは現實の矛盾から、詩人が逃避しようとしたことは、一度もなかつた。いつ歸れるか知れぬ、フランスへの出立をまえに、「いかなる運命の打撃をも受けぬ安全な道を求めるなどは、不埒きわまる狂氣の沙汰だ」と告げる、敬虔な受苦の精神。ヘルダーリンは、その生涯をつらぬいて、現實のすべてから自己を遮斷することなく、むしろ、すすんで苦惱を受け入れた

のである。その詩作はすべて、現實の破滅的な要素に浸りきつて、そのなかからたえず、彼自身の、そして彼自身を生んだ時代の新しい突破口を切りひらいてゆくことであつた。

詩人にとつて、はじめから安定した不動の立場などはどこにもない。むしろ、ヘルダーリンは、社會的な面からみても、個人の精神的な面からみても、すべてが固定した觀念によつていわば動脈硬化の状態に陥つてゐる既成の秩序を、つき崩すことから始めたのである。ヘルダーリンは、つねに停滯性を拒否するひらかれた精神であつた。それに何よりもまず、詩人であつた。言葉が概念の體系のなかで、自然とのみずみずしい繋りを失いあるいは切實な無限の生活感情から遠ざかつてしまふことに、何としても満足しえなかつたのである。ヘルダーリンは、世界を根源の混沌にかえして眺め直そうとする。このばあい、詩人の魂がまずこの混沌のなかへかえらねばならぬ。

斷片的な詩論のひとつで、ヘルダーリンは、詩の言葉が生活と精神のあいだの複雑なきびしい緊張から生れ

ることを詳しく説いているが、ヘルダーリンのはあいこの緊張は、たとえば觀念論哲學にみられるような、一方には無形式の生活をおき、他方には形式を求めてやまぬ精神をおくといった、いわゆる對極的な意味での緊張ではありえない。この緊張の解消も、精神が生活を形式によつて包み、象徴や意味の世界を別の次元に創り出すという、圖式的な綜合などでは、けつしてない。精神と生活の激しい噛みあい、ヘルダーリンは、たえず執拗といえるまでに、この矛盾と對決しつづけたけれども、問題は、眞實の詩の言葉をどうして獲得するかという、ただそれだけであつて、何らか完結した哲學體系を求めるなどは、まつたく意圖していなかつたとみるべきである。

ヘルダーリンは、詩人がおかれている現實の場における生きた言葉の喪失感から説き始める。混沌を混沌とさへ意識せぬ、あどけない幼兒のように、分裂を知らぬきよらかな状態は、消え失せてしまつてゐるのである。言葉を知らぬ原初の状態、いいかえれば、一切がそのまま生きた言葉であつた無垢の状態は、意識が加わり、反省が加わることによつて、たちまちあとかたもなく崩さ

れてしまふ。たとい瞬間的にこうした根源的な状態が惠まれるとしても、それはあくまでも瞬間的なものにすぎず、それを持續することは不可能である。

「生きとし生けるものと一體であるということ・・・ああ、ぼくは、いくたびこうした精神の高みに立つたことだろう。しかし、思念の生じる瞬間、ぼくは、その高みからつき落されてしまふ。ぼくは思索にふける。すると、やはり以前と同じように、獨りぼつちのぼくなのだ。現身としてのありとある苦惱に苛まれ、心の避難所である永遠に一なる世界は、あとかたもない。自然は腕をとぎし、ぼくはもはや自然に對してもあかの他人になつてしまふ。何ひとつ理解することもできない。」⁽³⁾「満ち溢れんばかりの感情の昂揚とそれがひいてしまつた後の云い知れぬ索莫感、心の潮の干満について、詩人は、いくたびとなく語つた。あるいはまた、調和に満ちた和やかな幼年時代の喪失を、いくたび悲しんだかわからな

い。

言語活動の面でも、こうした反省のなかで語られる言葉は、もはや自然との生きた繋りを失つて、あじけない日常の中間領域においてのみ役立つ、たんなる記號のよ

うなものでしかないのである。眞實の生命がみなぎる無限の生活感情とは、何の繋りもない。近代文明というものが、もし、意識による生命感の喪失を意味するとすれば、おそらくぼくらの語る言葉はすべてこうしたたんなる記號としての死んだ言葉にすぎないであらう。ヘルダーリンは、こうした日常の中間領域を去つて、眞實の生命が躍動する靈感：「Begeisterung」の場に成立つ言葉を求める。ここで注意しなければならぬのは、小説ヒュペリオン執筆時代のヘルダーリンが、こうした靈感の場を、どちらかといえば、自然發生的なもの、偶然的なもの、恵まれたものとして捉えようとしていたのに對して、その後、ディオティマを失つてからは、積極的に自分からこうした靈感の場を生み出してゆくことを、詩人としての自己に課せられた負托と考えるようになったことである。したがつて、恵まれるものがたと同じ瞬間であるとしても、その恵まれた瞬間は、詩人の意識の凝集点ともいうべきものであつて、きわめて積極的な自覺を伴つていたのである。

もしも、ぼくらからみずみずしい感動を奪つたものが意識であるとすれば、ぼくらは逆に、この意識を極限の

無意識にまでおしすすめてゆくことによつてしか、靈感の場をとりかえすることができない。靈感とは、ヘルダーリンの言葉をもつてすれば、意識が意識の埒をこえて無意識の限界に涉ろうとすることであり、個別的有機的なものが普遍的非有機的なものと化し、逆に普遍的非有機的なものが個別的有機的なものの領域へおし入つてくることである。詩においてふつう譬喩といわれる表現の可能性も、こうしたところにあるのだらう。ヘルダーリンのばあい、譬喩はたんなる譬喩ではない。根源的な生命が詩人の靈感の場において、たがいに形姿をとりかえるのである。エムペードクレス劇において、主人公エムペードクレスの没落の動機となる失言も、こうした靈感の問題につながつていことはいうまでもあるまい。「非有機的なもの」、「壓倒的な自然」、「底しれぬもの」についての明確な意識を求め、それらとの同一性を求めて苦闘しつづけたエムペードクレスの精神が、こうした意識の絶頂において、ついにみずから「非有機的な形姿」をとり、この「底しれぬ自然」とのみさかいを失つて、「神はわれひとり」という重大な言葉をもらしたのである。

いずれにせよ、ヘルダーリンは、詩の言葉の生れ出る場所を、こうした失言の危険をすらはらんでいる非有機化の極限、すなわち詩人の實感にとつて、一切が「何らの概念規定ももたず、實體と生命だけに溶解してしまふ」⁽⁷⁾靈感の瞬間に見た。「この瞬間、詩人は何ものをも所與として受けとることがない。何ひとつ既成のものからは出發しない」という。いわば、一度言葉が完全に失われてしまつた後に、その言葉の失われた、無形の、無秩序の、底しれぬ世界から、ふたたび眞實の詩の言葉がよみがえつてくるというのである。ヘルダーリンは、

こうした詩の言葉の生れる過程を、詩人自身による「創造的反省」⁽⁸⁾ „schöpferische Reflexion” と名づけ、あきらかに詩人の詩作を神の天地創造と類似の立場においた。もちろん、ヘルダーリンとて、無から有を生じさせるといった、俗な意味での神がかりの言語哲學をもつていたわけではない。まして、詩人をそのまま、世界を造りなす創造主であるなどと云つてゐるのではない。そのような僭越を無制限に認めようとするのではなく、逆に詩人をあくまでも言葉の世界につなぎとめようとしてゐるのである。詩人は、言葉による創造をのぞいて、魂

の不滅を信じたりすることができない。ときとして、ヘルダーリンが、詩人のはたらきを太陽のはたらきに、詩の言葉を太陽の光に擬することがあるとしても、そのときには、いつも太陽の光を成立たせる太陽以前の闇が念頭におかれてゐるのであり、詩人の言葉を生み出す無形の時代の力が同時に考えられてゐるのである。

Wenn die allverklärende dann, die Sonne des
Tages,

Sie des Orients Kind, die Wunderthätige, da ist,
Dann die Lebenden all' im goldenen Traume
beginnen,

Den die Dichtende stets des Morgens ihnen
bereitet,⁽⁹⁾

ヘルダーリンは、世界が、詩人の言葉によつて、はじめて未來の夢をはらむ眞實の言葉をもつことができる⁽¹⁰⁾と主張してゐるにすぎない。詩人は、どこまでも言葉の創造者なのである。言葉によつて存在をあらたに照しなおす、すなわち舊い固定した形骸を去つて、根源的な、

そして同時に新しい生命の場に存在を關係づけること、それは、きわめて高い意味での批判であり、人間の自己形成である。もつとも後期の抒情的讃歌に屬する“*Andenken*”のなかの最後の詩句

Was bleibt aber, stiften die Dichter.

も、こうした立場から受けとられなければならない。詩人は、現實の既成秩序と結びついている舊いよごれた言葉を忘れることによつて、現實の實相をするどく凝視し、かえつて自由に、創造的な言葉によつて新しく現實をとらえ、名づけ、眞實の秩序を指向しようとするのである。

ヘルダーリンが、たえず詩人の魂の純潔、“*Reinheit*”あるいはその清淨性“*Shuldlosigkeit*”をうたっているのも、じつは、この點に深い關係があると見なければならぬ。詩人の魂の清淨性とは、けつして罪や汚れに縁のないことだけではないのである。もつと積極的な意味を考えねばならない。すなわち、因襲や傳

統など、現實の限定されたかすかすの束縛を斷ち切つて眞の意味での自由の立場に身をおくこと、清淨とは、つねに根源的な生命（自然＝無底のもの）に對してあらうとすることなのである。自然の清らかさを直接に讀えた頌歌“*Unter den Alpen gesungen*”に於いて、つかのまの平和しか許されぬ、あわただしい戦亂の時代に生きる人間としての悲痛な感情をまじえながらも、純粹な自然に抱かれてあることのみを詩人に許された至上の幸福とみて、

und frei will ich, so

lang ich darf, euch all, ihr Sprachen des

Himmels!

Deuten und singen.

と、心から願うとき、ヘルダーリンの眼はあきらかにあけはなれた未來へと向けられていた。この頌歌が書かれたころの弟あての手紙にもあるとおり、これは「まだ生れて來ぬものたち」のために、ひらかれた未來の世界のために、現在「兄が弟に、人が人に、ひとつの魂が

ひとつの魂に對して、聖なるものの證人とならうとする」かぎりない希望を歌つたのである。聖なるものとは、純粹なもの、規定しがたいもの、すなわち根源の生命にほかならない。詩人は、こうした根源の場にみずからをおくことによつて、自身、自由な、純粹なものとして、限定をしらぬひらかれた未來にのみ對する。

現代は、詩人には、鎖された暗黒の時代としか思えなす。長詩 „Der Archipelagus” にあつて

Aber weh! es wandelt in Nacht, es wohnt, wie

im Orkus,

Ohne Göttliches unser Geschlecht. Ans eigene

Treiben

Sind sie geschmiedet allein, und sich in der

tosenden Werkstatt

Höret jeglicher nur und viel arbeiten die Wilden

Mit gewaltigem Arm, rastlos, doch immer und

immer

Unfruchtbar, wie die Furen, bleibt die Mühe

der Armen.

と歌われ、あるいはすでに小説ヒューリオンのなかのドイツ彈劾の章において、容赦なく決り出されているように、とめどなく全面的な停滯のなかへと落ち込んでゆく末期的な時代なのである。「社會全體の共同の名譽と共同の財産に對する無感覺」ひとつびとは眼前の利害にのみとらわれて、牡蠣殻のような生活にしがみついている。こうした救いがたい世界のなかで、詩人の魂の清淨性は、いつたいどのような意味をもちうるであらうか。

頌歌 „Dichterberuf” は、この問題をどこまでもつきとめようとする。そこでは、清淨という言葉に代つて、素材 „Einfalt” という言葉が用ゐられてゐるが、これは、啓蒙化され、神を失つた現代人の複雑な傾向に對抗して、詩人がとりうる唯一の態度なのである。この頌歌 „Dichterberuf” の最後の一節、

Furchtlos bleibt aber, so er es muß, der Mann

Einsam vor Gott, es schützt die Einfalt ihn,

Und keiner Waffen braucht und keiner

Listen, so lange, bis Gottes Fehl hilft.

啓蒙化された近代人の行爲は、すべて、根源の神性に對する恐怖からなされる慰戯にすぎぬ。しかし、詩人は、怯むことなく、この根源の神性に直接せねばならぬ。生きているかぎり、素朴のみをすがりにして、ときには誰からも顧みられぬという孤獨のなかでも、詩人はひとり、根源の生命力を頌えつづけるのである。「神の過誤が救いとなるまでのあいだは」とは、何という悲痛なイロニーであろう。ここでは、個人の死と社會全體の崩壊が並行的に救いとして暗示されている。詩人は運命のすべてを肯定しなければならぬ。現實の社會に對する痛烈な告發も弾劾も、すべて、より高いものへの感謝と稱讃の場においてのみ行われるべきものである。ヘルダーリンは、すでに、ホムブルクの公女アウグステによせた頌歌のなかで、自己の詩の基礎を次のようにうたつた。

Beruf ist mirs

Zu rühmen Höher's, darum gab die

Sprache der Gott und den Dank ins Herz mir.

ヘルダーリンは、詩人の行爲を、感謝と稱讃というもつとも素朴な行爲にかぎろうとするのである。詩人は、知識とか、身分とかにかかわりのない根源の状態のなかから、つねに神に向つて心をあけはなつてゐる者のあることを證さねばならぬ。詩人は、論理のトリックなどを一切用いようとしなぬ。全生活を賭けた最後のぎりぎりの言葉ひとつにつながろうとするばかり。一見、きわめて謙虚な態度のあらわれと思える、清淨とか素朴といった言葉も、最後まで詩人としての自己をつらぬこうとする、ヘルダーリンのきわめて積極的な自己主張を擔つてゐるものであることを忘れてはならない。⁽¹²⁾詩人の言葉は、最奥の胸裡からの混りけない魂の聲だというのである。⁽¹³⁾エムペードクレスが自己の失言に對して感じた深い罪の意識も、この言葉の純粹性への要求の裏返しにほかならない。ヘルダーリンのばあい、言葉が神と人間を結び、あるいはまた怖ろしい呪詛となつてその間を斷ち切つてしまふといつても、それは、あくまで精神的創造という場において考えられていることがらであつて、唱えられた呪文が聽手にばかりでなく、語つた方にも魔力を發揮するといつた、いわゆる呪文とか魔法の世

界には、いささかの繋りもないのである。

ヘルダーリンにとつて、「すべての宗教はその本質からみて詩であり」、⁽¹⁴⁾ 逆に文學は本質からいつて宗教的なものでなければならなかつた。言葉の問題は神の問題と切りはなすことができないのである。しかし、その神とはいつたい何か。神とは誰のことを指しているのか。

ヘルダーリンの後期の詩において、神が何らか特定の不動の存在を指していたとすることはできない。神が、完全な意味で、ギリシヤ神話の神としてあらわれたことなどは、一度もないのである。むしろ、神はつねに、ヘルダーリンのばあい、何らか終末論的な意味での神、默示録の意味での「やがて来るべき神」である。さきに挙げた頌歌、「Unter den Alpen gesungen」や、同じく「Dichterberuf」においてみられるような、詩人がひとりそのまゝに立つという神も、やはり、一切の偏見を捨て去つた根源的な生命の場においてのみ感じることのできる、やがて来るべき時代の神にほかならない。すべての人々が啓蒙化され、知識のみはあつても、もはやその根源を思うこともなく、感謝の心を失つてしまつてい

る、荒れ寂びた時代、神は、人間が活動しているこの領域には、まづたく存在せぬと思えないのである。もはや、神がそのままで心の救いや慰みの場所とはなりえない。ヘルダーリンが、「おお 神よ!」と呼びかけるときも、詩人のまのあたりに、ある特定の神が存在していると思つてはならない。ヘルダーリンは、悲歌「Brod und Wein」第七聯において次のように歌つてゐる。

Aber Freund! wir kommen zu spät. Zwar leben
die Götter,

Aber über dem Haupt droben in anderer
Welt.

Endlos wirken sie da und scheins wenig zu
achten,

Ob wir leben,

この窮迫の時代、一條の光も射さぬ夜、いわば、現實の怖ろしい空隙のなかから、詩人の神への叫びは、呼び寄せられるのである。詩人の生きる現實の時代の諸々の

缺陷によつて詩人の胸にひろがるはてしない空虚が、逆に無限の光明を呼び迎えようとするともいへばよいのか。「わが骨も砕くるばかりに、わが敵は、ひねもすわれにむかひて、なんじの神はいつくにありやと、いひのしりつつ、われをそしれり。ああ、わがたましひよ、なんじ、なんぞうなたるや。なんぞ、わがうちに思ひみだるるや。なんじ、神を待ちのぞめ」と詩篇の詩人が歌つたこうした神こそ、ある意味でまたヘルダーリンの神であろう。現代は、詩人にとつて、喪われた神話の世界とまだ到らぬ時の終末にひきさかれた、神なき缺乏の時代であり、中間の時代なのである。詩人の孤獨な追憶と悲愁、祈りの時、悲歌 „Menons Klagen um Diöima“ 終聯に美しく歌われているような、詩人の感謝

と期待の時なのである。あるいは、また、さらに積極的に神々の再來を夙より感知して、「大地の懷に、またひとびとの胸裡に、いきりたち沸騰するひそかな不安の精神」の聲を聴きとり、言葉なき神々の言葉、すなわち「變化と生成」をときあかすべき時なのである。詩人には、わずかな氣配だけあればよい。現實のさまざまな制約に縛られた事物の聯關のなかで、ひとびとのみじかい

まなざしがゆきまどつているとき、詩人は、そこからあけはなれた未來へのかすかな徴候をつかみとつて、一切の制約をこえた限りない希望をうたうという。ヘルダーリンは „Rousseau“ と題する頌歌において、この時代の先驅的精神を頌えたが、その第八聯に歌つてゐる。

Dem Sehenden War

Der Wink genug, und Winke sind

Von Alters her die Sprache der Götter.

あるいはまた第十聯、

Kennt er im ersten Zeichen Vollendetes schon,

Und fliegt, der kühne Geist, wie Adler den

Gewittern, weissagend seinen

Kommenden Göttern voraus,

詩人の精神は、神々の再來を豫言し、時代にさきがけてときあかす。ヘルダーリンの詩は、いかに神秘的な

様相を呈するときでも、つねにその底には時代との密接な繋りをひそめているのである。

十八世紀と十九世紀の轉換期、世界の終末に生きているという、共通の危機意識のなかで、詩人は、たえずはるかな未來をめざして歌いつづけた。その終末觀的な危機意識もけつして、たんなるニヒリズムや不合理主義、現實離脱の精神とつながるものではない。すでにテュービンゲンでの在學時代以來、學友ヘーゲルやシェリングとともに、「精神の共同」という合言葉のもとに、當時のフランス革命にわきたつ世界の激動をそのまま福音書の「神の國」に關する豫言と結びつけ、愛と自由の共和國を憧れていたヘルダーリンである。個人個人の陶冶のみを考えて、社會全體の變革をあとまわしにしたりすることはできなかつた。もちろん、革命に對する偉大な傍觀者であつたゲーテに對して、最後まで敬意を惜しまぬ彼らであつたけれども、その古典主義的な教養という理念も、一種の後退的な諦觀としか思えなかつたのである。ヘルダーリンたち若い世代は、政治や時代からの絶縁をあくまでも拒否した。と同時に、彼らは、現實における變革を、たんなる狭い意味での政治の場から、

國民全體の精神生活の場までひろげて考えずにはいられなかつた。たんなる机上のプランや國家組織の變革だけでは、どうにもならぬことを痛切に感じていたのである。したがつて、彼らのいう「神の國」の思想も、彼らの激しい積極的な時代意識ときわめて密接に結びついているのであつて、これを言葉どおりそのまま、彼岸への逃避とか、現實を遊離した純粹な觀念の世界への沈潜を意味すると考えることはできない。當時のはてしない無政府主義的な風潮、とりわけフランス革命による社會不安、思想界の動搖、諸黨派間のみにくい憎惡や、またジャコバン派の恐怖政治など、さまざまの悲惨な現象にもかかわらず、彼らは、心の奥底から湧きあふれるような強い希望をかけようとしていたのである。彼らは、革命時代の破滅的な現實のすべてを、けつきよくは、崩壊してゆく舊い生命の示すひとつのしるしとして、また同時にかがやかしい未來を約束するひとつのしるしとして受けとつていた。社會の混亂も、ひとびとの動搖も、はるかな「神の國」の再來をめざして、不正と不調和の世界が完全な終末を告げる、その前ぶれと思われたのである。

後期、すなわちホムブルク滞在期以後のヘルダーリンにおいても、こうした考え方はすこしも失われていない。それどころかむしろ、個人的な苦悩の體驗と深い思索をへて、時とともにさらに鋭くときすまされ、若いころのものと較べてはるかに深刻な思想へと成熟していった。いたるところで行詰りになつてしまふ時代、救いがたいドイツである。「神の國」の思想は、この息ぐるしい時代のなかで、いかにして時代の完全な終末を待ちのぞむか、いな、いかにして時代の完全な終末を實現させるべきかという、ぎりぎりの切羽づまつた問題として、最後まで、ヘルダーリンの詩作の根本的な主題をなしているのである。後期のヘルダーリンは、もはや、テュービンゲンにおける學生時代のように、かずかずの觀念をならべて、人類の理想を聲たかく、歌つたりはしない。ある意味では、シラーやドイツ觀念論哲學からの借りものにすぎなかつたともいえる、初期の詩作の抽象的な觀念は、すべて作品から姿を消し、そのかわり、祖國とか、國民とか、故郷といった、より具體的な切實な現實生活の場に、詩の基盤が据えられている。もちろん、現實といつても、目のまえにある所與としての現實では

ない。あくまでも否定を通して、きわめて高い意味を擔わされた、いわば實踐的課題としての現實なのである。ヘルダーリンの祖國に對する深い認識は、詩人としての深い自覺とたがいに並行している。詩人にとつて、眞の意味での實踐とは、祖國的なものを母胎とする新しい詩の創造をおいて、ほかにありえないものである。さきに引用した頌歌“Rousseau”にみられるように、詩人は、時代の暗黒のなかから、かすかな神の合圖を感じとつて、それを創造的な歌によつて國民に告知し、ひとびとの心に根源の感情をよびさましなから、眞の「精神の協同」を準備しなければならぬ。詩人が神々と人間のあいだの仲介者であるといつても、けつして詩人は、神々の意志が魔法のように素通りしてゆく、たんなるメデイウムではないのである。ヘルダーリンにとつて、「國民の詩人」¹⁹としての自覺は、そのまま、獨自の詩の言葉をいかにして確立するかという問題であり、それは、ホムブルク滞在期における數多くの哲學的論文斷片が證明するように、じつに言語に絶した精神的苦闘を詩人に強いたのである。

しかし、この徹底的な認識への努力によつて確立されていつたヘルダーリン独自の詩法、ドイツ文學史上、後にも先にも比類をみない獨特の言語形式とは、いつたいどのようなものであつたか。詩の内容と語彙、韻律組織などの深い独自の關聯を、ひとつひとつの詩についてときあかしてゆくことこそ、いうまでもなく、ヘルダーリン研究の忘れてはならぬ最大の課題であるが、ここでは、その具體的な方法の根底のみを、詩人に即して、たずねてみたい。

ヘルダーリンは、エムペードクレス劇の悲劇としての理論的根據を論じた論文⁽²⁰⁾のなかで、自分の詩法の根底を明らかにしている。すなわち、詩は、詩人の生活と現實のなから生れるものであり、あくまでも詩人の實人生に現在する無限の生活感情の賦形でなければならず、根本的な素材の點では詩人の魂に切實に觸れるものでなければならぬが、しかし、詩人の實感があまりに強烈で、現實的感性的なものへの繋りを極度に固執するようなどきは、それは、もはや全體的感情を擔うこともできず、無常にさらされてしまふほかない。詩人は、「まさしく、この深刻な切實感を表現するゆえ、かえつて、自

己の性格や主観を、さらには現在、自分が向いあつてゐる客體をも、すつかり否定しつくすのである。詩人は、それらを、別種の人格、別種の客體へと融し込む……」⁽²¹⁾詩人の感情が限界をこえて、たんなる混亂や叫喚に陥らぬようにするためには、詩人は自己の心情を別種の形式に移さねばならない。「別種の形式は、別種であればあるほど、かえつて生き生きしたものとなる。詩人が自己の世界で感じとる神々しい精神は、眼のまへの詩の素材が詩人の心情や詩人の世界との類似性をもたなければもたぬほど、その全然別種といえる藝術的素材のなかで、かえつて生かされるのである。」⁽²²⁾ヘルダーリンはこう述べている。なぜ、ヘルダーリンが、自己の苦惱をじかに形象化し、自分の生きていた現實と正面からとり組むことをしなかつたか。また、何のために、遠い古代ギリシヤの自然哲學者などをわざわざ自分の劇の主人公にえらんだか。その劇作への努力が、いわば自分自身の苦境からの突破口をひらくことであり、時代全體の新しい世界への脱出を求めることであつたとすれば、それは、あまりにも迂遠な方途ではないだらうか。こうした一聯の疑問に、ヘルダーリンが、みずから解答を與えよう

としたものと思われる。これは、もちろん、とくに劇詩について述べられたところであるが、同時に、その詩作全般にわたつてあてはまることであらう。抽象的な言葉をもつてすれば、ヘルダーリンにとつて、悲劇的とは極端と極端の緊張にひきさかれた存在の運動方式であつたのである。こうした意味で、ヘルダーリンの後期の詩は、すべてつねに悲劇的な根底をもつていた。しかし、ヘルダーリンによれば、その悲劇的な詩の表現も、あくまで冷靜な計算によるものでなければならなかつたのである。⁽²²⁾ ホムブルク滞在期以後のヘルダーリンは、しばしば「神聖な冷靜」、*Heilige Nüchternheit*⁽²³⁾ という言葉を用いて、詩人がたんなるデイオニソスの陶醉に陥つてしまうことを強くいましめてゐる。感情の抑制というより、むしろ、歡喜であれ苦惱であれ、はげしい靈感の場に、つねに冷靜な意識をはたかせつづけようという、緊迫した矛盾のうちに確立されたきわめて知的な詩作の態度、それは、詩人の苦悩の想像を絶した深刻さを逆に證明すると同時に、迫り来る精神錯亂への、意識的な、眞剣な、それだけにあまりにも悲痛な詩人の抵抗であつたといえよう。この神聖な冷靜によつて示さ

れる古典主義的な詩作の態度こそは、ゲーテ、シラーの古典主義とはまったく別のものであつたけれども、ヘルダーリンを、當時のドイツ浪漫派と、はつきり區別するものなのである。ヘルダーリンは、詩作を自然な發想の場から意識的な知性的な反省の場に移そうとする現代詩人にさきがけた、きわめて鋭い批評精神であつた。ヘルダーリンは、終生、自己の精神の方法を模索しつづけたのである。

ホムブルク滞在期以後のヘルダーリンの詩作の方法は、ふつう神話的賦形という言葉によつて特色づけられている。ヘルダーリンは、その唯一の劇作において、ギリシャの傳說的人物を素材として用いたように、抒情詩においても、たえず古代神話を素材として用いたし、また、神話をただ素材として用いただけでなく、後期においては、その用い方がまつたく獨自の深い認識のうえに立てられていたからである。さきにも引用したホムブルク滞在時代の宗教哲學的論文斷片⁽²⁴⁾のなかで、詩人は、神話に根源的な深い宗教性をみるとともに、そこに、すべての詩の源泉のひそむことを明らかにしている。神話

は「内容からみて、たんなるイデーとか、概念とか、性格のみではありえないし、また、たんなる事件や事實のみでもありえない。しかも、この兩者がばらばらに含まれているのではなく、まつたくひとつに統一されている⁽²⁵⁾」ヘルダーリンは、神話に、知性と歴史性、精神性と具象性の結晶をみたのである。したがつて、神話を用いて賦形することとは、精神性に明確な具象性を與え、知性に深い歴史性を與え、詩人をたんなる個人⁽²⁶⁾の場から社會全體の場に立たせることでなければならぬ。神話こそ、ヘルダーリンにとつて、無形式の創造的混沌のなかから、形式、すなわち具體的な形象をもつた言葉を生み出してゆく、有力な手がかりであつたといえよう。ヘルダーリンは、たんに、古代人のたくましい想像力の模倣をしたり、その自然に對する原始的、擬人的信仰を、そのまま現代に呼びさまそうとしていたのではないのである。神話を用いて賦形をするといつてもそれは、根源から現實に肉迫しようという、眞の宗教性のための手段であつて、けつして傳承神話のそのままの復活などを意味しているのではない。したがつて、逆に傳承神話の側からみれば、神話がたえず詩人の生きる時

代の場におかれ、深い精神性を與えられ、かゝつてその神話のもつ何らか特定のイメージを剝奪されてゆくこととなるのである。たとえば「長詩」„Der Archipelagus”の第二聯の始め、

Immer, Gewaltiger! lebst du noch und ruhest
im Schatten

Deiner Berge, wie sonst: mit Jünglingsarmen
umfängst du

Noch dein liebliches Land, und deiner Töchter,
o Vater!
Deiner Inseln ist noch, der blühenden keine
verloren.

これは、第一聯の末尾におかれた„Alter!”という呼びかけからひき出された詩行であるが、いうまでもなくここには、ポセイドンに關する古代神話への繋りがうかがわれる。しかし、ヘルダーリンは、もはやポセイドン⁽²⁷⁾をポセイドンとは名づけない。ポセイドンに關する情欲的な傳説も父と娘の繋りに變えて、まつたく精神化し

てしまい、かえつて、はるかに躍動する自然の力をうち出してゐるのである。ここでは、年老いた海の神ポセイドンが、ニンフや他の女神たちの後を追いまわしたりはしない。その親しみぶかい氣まぐれな神のおもかげは、いわば肉體も性格も奪われ、むしろ四大のなかに姿を没してしまつてゐる。ここでは、何よりも自然現象としての海そのものの生動がつよく感じられる。しかも、たんなる海そのものの描寫ではとうてい與えられぬ、海とそこに生きる人間の歴史との切實を繋りが、暗示的に表現されてゐるのである。自然の力そのものが歴史の場におかれてゐるといへばよいのだろうか。これは、ほんの一例にすぎないが、一方では神話のもつ簡明な形象性を詩の言葉に求めながら、同時に他方ではそうした具體的な限定を極力否定しようとする。ヘルダーリンの詩は、つねにこうした激しい矛盾と緊迫のなかに成立つてゐるのである。要するに、神話を用いて賦形を行うということとは、ヘルダーリンにとつて、詩の言葉に生き生きとした躍動性を與える不可缺の手續であつた。それは、人間の魂と大自然の觸れあひを躍如たらしめるための、あくまでも不可缺の手段だつたのである。ほくらは、ヘル

ダーリンの詩における神話性を論ずるばあいに、つねに二つの側面のあることを注意しなければならない。ひとつは、事物の根源的な混沌のなから、歌として言葉が生れ出てくる過程を、最初における神話の成立過程と並行させて、詩作の根底に深い宗教性を與え、詩を審美主義的な個人の場から、社會全體の共同の場に移して考えようとする際にみられる、いわば根源的な意味での神話性。もうひとつは、現代という場において、そうした詩作を行うために、手段として詩人が古代の神話を用いるときに考えられる神話性。この二つである。前の意味での神話性は、ヘルダーリンの詩を成立させる根底ともいふべきものであつて、詩人がホムブルク滞在期における徹底的な思索のすえ、こうした自覺に到達して以來狂氣に陥るまでいさかも變ることのなかつた根本的な詩作の態度であるが、後の意味での神話性、すなわち傳承神話のとりあげ方には、かなり顯著な變化がその詩作のうえに認められるようである。もちろん、ヘルダーリン初期の、いわゆるテュービンゲン時代の讃歌にみられたような、たんなるアレゴリーとしての神話、概念を包むための裝飾にすぎないような神話は、時とともに姿

を消している。しかし、神話によつて言葉のもつ根源的な形象性を獲得しようとする努力と、逆に傳承神話のイメージをできうるかぎり「より廣般な精神性」⁽²⁶⁾へ解きほごしてしまおうとする努力が、たがいに切りはなしがたく交錯しながら、かぎりない緊迫のうちに、後期の詩の言葉を形成してゆくのである。そして、その神話のもつ傳承的な意味體系は、次第次第に崩されてしまう。後期自由律讃歌の段階になると、この傾向はますます強められ、いわば一切の前提なしに、詩を詩のなかの言葉だけで説き明かそうとする詩人の激しい自己要請が、簡勁であると同時に、主觀性を極力排除した鋭い迫眞力をもつた言葉のつみ重ねとなつてあらわれてくるのである。

ヘルダーリンは、いたるところで傳承神話の解釋をやりなおし、近代人としての新しい神話把握をめざした。詩人にとつてもつとも後期の勞作に屬するアンテイゴネの翻譯にさいしては、時代の轉換期において、「ひとびとに至高の存在を感じさせる神の名」を變えることが必要である⁽²⁷⁾。ヘルダーリンは、ツォイスを「大地の父」、「Vater der Erde」あるは「時の父」Vater der Zeit」とする言葉におきかえ、さらに、

アーレスは「戦ふの精」、「Der Schlachtheist」、ヘーロスは「平和の精」、「Der Friedengeist」、バックスは「歡喜の神」、「Der Freuden Gott」など、ギリシヤ神話の神々の名を自在に自己の言葉におきかえてしまつてゐる。もちろん、これはたんなるドイツ語化ではない。神話の神々に、まつたく独自の新しい意味が與えられてゐるのである。⁽²⁸⁾こうなると、何のために神話を用ゐるのか。神話は、すでに傳承神話としての神話性をほとんど失つてしまつてゐるといふねばなるまい。

ヘルダーリンの詩のなかの神は、おしつめてゆけば神についての一切の表象を否定してしまふような神であり、神話は、神話そのものを否定してしまふような神話なのである。要するにすべては、無名のものを名づけるための、やむにやまれぬ手續きであつた。神話的賦形といい、あるいはまた別の言葉でいうとしても、ヘルダーリンの独自の詩作の方法を何らか固定したものとしてきめつけてしまふことはできない。ヘルダーリンにとつて、方法は、方法自體がたえず發展し、變化してゆくような方法であつた。つねに、詩を書くことが方法への反省であり、また、方法への反省が次の詩を書くつよい

原動力となつていたのである。後期の詩人の複雑な、あまりにも急速な精神の結晶過程には、いかなる言葉をもつてしても、ほとんど近よりがたいものが感じられる。

名づけることのできぬものを名づけようとする事、

ヘルダーリンによれば詩人は、すでに述べたようにきわめて敬虔な態度を守りながら、しかも、存在の根底にあるもの、いかえれば、未だ姿をあらわさぬ壓倒的なものを、神に代つて名づけ、あらわなものとすることによつて、それを壓倒的な存在に變えようとするのである。敬虔と不遜のあいだに激しくひき裂かれて、詩人はつねに破滅への危険にさらされているといわねばならぬ。
5。

Was wäre denn der Himmel und das Meer
Und Inseln und Gestirn und was vor Augen
Den Mensch'n alles liegt, was wäre es auch
Diss todte Saitenspiel, gäb' ich ihm Ton
Und Sprache und Seele nicht? was sind
Die Götter und ihr Geist, wenn ich sie nicht

Verkündige.

エムペードクレスの語る痛烈な演神の言葉は、一面において、ヘルダーリンの考える詩人の使命を、もつとも積極的に云いあらわしているものといふことができよう。

註

- (1) ヴェーレンドルフ Casimir Ulrich Boelendorf 宛、一八〇一年十二月四日附の手紙から。
- (2) 論文 „Über die Verfahrungsweise des poetischen Geistes” の末尾につけくわえられた一章 „Wink für die Darstellung und Sprache” 参照。
- (3) 小説 „Hyperion” 第一巻・第一章から。
- (4) ここでは、ヘルダーリンにみられる二つの中心的な考え方である、無意識と意識、靈感と冷静(本文、後に説明)の緊張の問題と、有機と非有機、個體と全體の緊張の問題を併せて考えてみた。ヘルダーリンのはあい、内面的にみて靈感のはたらきと考えられるものは、外面的には、けつきよく、「天上の炎」(das Feuer vom Himmel) (ヴェーレンドルフ宛の手紙参照) すなわち、自然の非有機的なはたらきにほかならず、これら兩者は

つねに並行して考えられてゐるからである。(なお、この語と關つて Wilhelm Michel: „Das Leben Friedrich Hölderlins“ 四三六頁以下を参照)。

やがて、個體と全體の對立は、*アヘン*論文 „Grund zum Empedokles“ によつて、自然 „Natur“ と人為 „Kunst“ の對立の問題とつて全面的に論じられてゐる。その Kunst を説明するための概念とつて „Organisch“ „Besonderheit“ „Selbsttätigkeit“ „Reflexion“ „bilden“ „kultivieren“ „denken“ „unterscheiden“ „vergleichen“ „Sprache“ 等の言葉が用ゐられ、Natur を説明するときは „aorgisch“ „Allgemeinheit“ „unbegreiflich“ „unföhlbar“ „unbildlich“ „unbewußt“ „unbegrenzt“ „sprachlos“ „Liebe“ „Element“ といふた言葉が用ゐられてゐる。有機的「非有機的」といふのも、けいして、現代の自然科学に用ゐられてゐるやうな、「有機」「無機」の概念とひとつとちつてはなから。

(5) 何れも、論文 „Grund zum Empedokles“ である。

(6) 悲劇 „Der Tod des Empedokles“ 第一稿の第一幕・第四場、*エムペドクレス*の言葉

Ich kann' es ja,

Das Leben der Natur, wie soll' es mir

Noch heilig sein, wie einst! Die Götter waren

ヘルダーリン小説

Mir dienstbar nun geworden, ich allein

War Gott und sprach's im frechen Stolz heraus.

(7) 前掲論文斷片 „Wink für die Darstellung und Sprache“ である。

(8) 註 „Der Archipelagus“ (V. 35~V. 38) Ernst Müller: Hölderlin 三二八頁以下参照。

(9) 一八〇一年の春、詩人がメイスのハウプトヴァルから出した弟宛の手紙より。

(10) 一七九九年一月一日附、弟宛の手紙参照。

(11) この頌歌の終聯は、きわめて難解であるが、こゝでは „Gottes Fehl“ という言葉を、論文 „Anmerkungen zum Ödipus“ に引かれてゐる「神の不實」, „göttliche Untreue“ という言葉に近い意味に解した。同論文および „Anmerkungen zur Antigone“ 参照。

(12) エルンスト・ミュラーは前記研究書に於いて、こうしたヘルダーリンの態度を、ヘーゲルのイエス解釋に比較してゐる。「イエスは、もつて生れた」一切の絆が無慙に斷ち切れるのを平然と眺めることができた。なぜならこの自由な美しい繫り(たとえば、両親や友人や弟子らとの繫りなど)も、同時にきわめて不純なものへと結びつき、足枷となつて、專制的なものにさえ卷きこまれていたからである。純粹な心情の持主だけが、なんらの苦痛を覺えることなく、純粹なものと不純なものを分離す

ることが出来る。不純な心情の持主は、この兩者に同時にしがみついているのである」(Hegel: Der Geist des Christentums und sein Schicksal Ⅱ) 根源的な場に立つために、一切の束縛をふりはらい、現實的なものに對して、つねに距離を保つてゐること。ヘルダーリンも、つねにこうした宗教的な態度を詩人に課した。エムペードクレス劇で、エムペードクレスが愛弟子パウザニアスを自分の許から強いて去らせるのも、こうした心情の純粹性を守るためであり、それがヘルダーリンの悲痛な現實體驗の反映であることはいうまでもない。

- (13) 純粹性ということは、あくまでも魂の問題であつて、たんなる思辨とか哲學などとはまつたく無關係である。詩人をどこまでも魂の場に繋ぎとめたということ、これがヘルダーリンをシラーの思想詩から、きつぱり分つところのものである。たとえば後期の斷片の中で、ヘルダーリンは、次のように歌つてゐる。

.....dann sitzt im tiefen Schatten,

Wenn über dem Haupt die Ume säuselt,

Am kühlenden Bache der deutsche Dichter

Und singt....

.....fernhin lauschend in die Stille,

den Seelengesang.

- (14) 論文斷片 „Über die Religion” 参照。

- (15) フランクフルト滞在期の詩 „Die Muse” より。
(16) 長詩 „Der Archipelagus” 終聯。

.....und die Göttersprache, das Wechseln

Und das Werden versteh',....

- (17) Hoffmeister: Die Heimkehr des Geistes 中のヘルダーリンに關する項 (二二頁以下) 参照。

- (18) 同右。なお、ここでいう「神の國」は das Reich Gottes に關する豫言とは、たとえばルカ傳二十一章

「...民は民に、國は國に逆いて起たん。かつ大いなる地震あり、處々に疫病饑饉あらん...地に大いなる艱難ありて、御怒の民に臨み、...また日・月・星に光あらん。地にては國々の民なやみ、海と濤の鳴り轟くによりて狼狽へ、人々おそれ、かつ世界に來らんとすることを思ひて膽を失はん。これ天の萬象ふるひ動けばなり。其のとき人々、人の子の能力と大いなる榮光とをもて雲に乗り來るを見ん。これらのこと起り始めなば仰ぎて頭を擧げよ。汝らの贖罪^{あがなひ}近づけるなり...斯くの如く此等のこと起るを見れば、神の國の近きを知れ」

- (19) たとえば、頌歌 „Dichternuth” 第四聯

.....so sind auch wir,

Wir, die Dichter des Volks, gerne, wo Lebendes

Um uns athmet und wallt, freudig, und jedem

Jedem trauend,.... hold,

この詩の第二稿及び第三稿 („Bildigkeit“) である „Wir, die Dichter des Volks“ という言葉は、それと „Wir, die Sänger des Volks“ である „Wir, die Zungen des Volks“ と書きかえられている。

後期のヘルダーリンが、いかに祖國的なもので重きをおき、みずから「國民の詩人」としての立場をうらなうとしたかは、数々の詩や手紙や論文によつて明らかである。たとえば、後期の斷片、

....Nemlich sie wollten stiften

Ein Reich der Kunst. Dabei ward aber

Das Vaterländische von ihnen

Versäunet und erbärmlich gieng

Das Griechenland, das Schönste, zu Grunde.

あるはまた、同じく斷片、

Verbotene Frucht, wie der Lorbeer, aber ist

Am meisten, das Vaterland. Die aber kost'

Ein jeder zuletzt,

また、一八〇三年十二月のヴァイルマン・Gerhard Friedrich Wilmans 宛の手紙でも、「ともかく戀愛詩などはいつちも疲れきつた飛翔しかできません。どんなに素材を變えたところで、それでばかりの達することのできるの

は、ほんのある程度までなのです。しかし、祖國頌歌のけだかい清らかな歡喜は、これとは、まづたく違ひいます」と書いて、新しい祖國頌歌の詩人としての隠しきれぬ自負を語っている。こうした自覺がいかに言語の間

題にづなかるかは、たとえば „Anmerkungen zur Antigone“ などの論文によつてあらわになることになり、(20) 前掲論文 „Grund zum Empedokles“ のなかで、よく最初に悲劇の一般的性質を論じた „Allgemeiner Grund“ と題する一章。

(21) 前註の論文より

(22) たとえば „Anmerkungen zum Ödipus“, „Anmerkungen zur Antigone“ などを参照。ヘルダーリンは、藝術作品でみられる法則的な計算 (Kalkül) というものをいねに重視している。

(23) ヘルダーリン独自の云々まじりであるこの „heiligstüchtern“ という言葉は、明らかに „begeistern“ と同じく同義である。靈感に關する箴言風の斷片 „Es gibt Grade der Begeisterung...“ 及び „Das ist das Maß der Begeisterung...“ を参照。

(24) 前掲論文 „Über die Religion“ 参照。

(25) 前註論文より

(26) „Anmerkungen zur Antigone“ 参照。

(27) 同右

(28) ヘルダーリンの後期の詩作におけるキリスト教精神の問題が、こゝで併せて考えられなければならない。„Hölderlin-Jahrbuch“ 一九四八年版所載の Meta-Corssen の論文 „Die Tragödie als Begegnung zwischen Gott und Mensch, Hölderlins Sophokles-Deutung“, 参照。